

神が確かにあなたがたの中に

コリント人への手紙第一 14章 20-25節

はじめに

以前から少しずつ「コリント人への手紙第一」を少しずつ学んでいます。「コリント人への手紙第一」の12-14章には、「御霊の賜物」について書かれています。

コリント教会では「御霊の賜物」を巡って、混乱が起きていました。ある人たちが「御霊の賜物」の中でも「異言」こそ最高のものだと考えて、皆に異言を語ることを求めたり、礼拝の中で無秩序に異言で祈ったり、賛美したりしていようです。「異言」とは、誰にも理解できない言葉で、神様に向かって祈ったり、賛美したりするものです。

使徒パウロは12章で、「異言」は御霊の賜物の一つに過ぎず、皆が異言を語らなくても良いと教えています。13章では、皆が求めるべき賜物は「愛」と教えています。そして14章では、「異言」と「預言」を比較して、異言よりも預言を求めるようにと教えています。

「異言」は、誰にも理解できない言葉で、神様に向かって語り、自分を成長させるものだけれども、「預言」は、誰にでも理解できる言葉で、人に向かって語り、教会を成長させるものだと言います。預言は必ずしも、未来のことを言い当てるものではなく、人を育てる言葉であり、勧めや慰めを語るものだと言われています。

1. 考え方においては大人に

今日の聖書箇所 20節でパウロは、「**兄弟たち、考え方において子どもになってはいけません。悪事においては幼子でありなさい。けれども、考え方においては大人になりなさい**」と言っています。子どもというのは、自分のことばかりを考えます。子どもなのに、周りのことばかり気にして気を遣う子どもを、「子どもらしくない」と言ったりします。異言を語る人たちは、自分と神様との関係だけを考えて、また自分の成長のことばかりを考えていました。だからこそ、礼拝で無秩序に異言で祈ったり、賛美したりして、礼拝を混乱させていたのです。パウロは、そのように自分と神様との関係だけを考えて、また自分の成長のことばかり考えている異言を語る人たちのことを、「子ども」とであると言っているのです。

私たちは、自分と神様との関係を確立することは大切なことです。そして自分の成長を考えることも大切なことです。しかし教会では、他の人も集まっているので、他の人のことも考えなければなりません。自分と神様との関係だけでなく、自分と他の人の関係や、他の人と神様との関係も考えなければなりません。また自分の成長のことばかりでなく、他の人の成長のことも考えなければなりません。それが、「大人」の信仰であると言うのです。自分

の信仰のことばかりでなく、他の人の信仰のことも考える、それが「大人」の信仰であると言うのです。

2. 異言は信じていない者たちのためのしるし

パウロは今日の聖書箇所、特に未信者の信仰のことを考えなければならないと教えています。自分の信仰のことばかり考えて、未信者をつまずかせてはならないと言うのです。

21 節でパウロはこう言っています。「**律法にはこう書かれています。『わたしは、異国の舌で、異なる唇でこの民に語る。それでも彼らは、わたしの言うことを聞こうとしない』と主は言われる**」。これは、旧約聖書のイザヤ書からの引用ですが、当時北イスラエル王国は、神様の言うことを聞こうとしなかったため、神様の裁きとしてアッシリア帝国に滅ぼされます。そしてアッシリア帝国に捕囚として連れて行かれます。そして異国の舌で、異なる唇で語られることになります。

パウロがここで言おうとしていることは、異なる言葉は、神様の言うことを聞こうとしなかった人たちに裁きとして語られるものだということです。そこで 22 節でこのように言います。「**それで異言は、信じている者たちのためではなく、信じていない者たちのしるしであり、預言は、信じていない者たちのためではなく、信じている者たちのためのしるしです**」。ここでは、異言は「信じていない者たちのしるし」、つまり神様の言うことを聞こうとしない人たちの間で語られるものだというのです。

そこで 23 節では、このように言います。「**ですから、教会全体が一緒に集まって、皆が異言で語るなら、初心の人が信じていない人が入って来たとき、あなたがたは気が変になっていると言われることにならないでしょうか**」。異言は、神様の言うことを聞こうとしない人たちの間で語られるものです。しかし教会に求道してくる未信者たちは、神様の言うことを聞こうとして来る人たちです。ですからその人たちの前では、異言で語ってはいけないということなのです。もしその人たちの前で異言で語るなら、気が変になっていると言われて、躓かせることになるというのです。

3. 皆が預言をするなら

パウロは、預言は「信じている者たちのためのしるし」だと言います。つまり神様の言うことを聞こうとする人たちの間で語られるものです。教会に求道してくる未信者たちは、神様の言うことを聞こうとして来る人たちです。ですからその人たちには、異言ではなく、預言を語らなければならないのです。預言とは、誰にでも理解できる言葉で、人を育てたり、勧めたり、慰めたりする言葉です。

そこでパウロは、24-25 節でこう言います。「**しかし、皆が預言をするなら、信じていない人や初心の人が入って来たとき、その人は皆に誤りを指摘され、皆に問いただされ、心の秘密があらわにされます。こうして、『神が確かにあなたがたの中におられる』と言い、ひれ伏して神を拝むでしょう**」。預言は、神様の言葉を語ることです。現代で言えば、礼拝の説教にあたると言えます。

教会の礼拝で、誰にでも理解できる言葉で神様の言葉が語られる時、教会に求道してくる未信者たちは、「神が確かにおられる」と言って、神様を礼拝するようになるのです。

しかしその場合、「誤りを指摘され、問いただされ、心の秘密があらわにされます」。つまり「罪」を知るようになります。人が神様を信じ、神様を礼拝するようになるには、自分の「罪」を知らなければなりません。自分の「罪」を知ってこそ、人は真実に神様の御前にへりくだり、神様を礼拝するようになるのです。

「罪」とは何でしょうか。それは、神様が求めていることに従わないことです。神様が私たち人間に求めていることは、神様を愛し、隣人を愛することです。その意味で「罪」は、神様を愛さず、隣人を愛さないことです。そして自分だけを愛して、自己中心に生きることです。私たち人間は、アダムとエバが神様の命令に背いて禁断の木の実を食べた時から、罪の性質を持って生まれてきます。その意味で、すべての人間は生まれながらに罪の性質を持っています。そして罪ある人間は、神様の裁きとして、この世でのあらゆる悲惨と、肉体の死と永遠の地獄の刑罰を経験しなければなりません。

しかし神様は、私たちを救うために、御自身のひとり子イエス様をこの世に遣わしてくださいました。イエス様は、私たちの罪を償うために十字架で死なれました。また私たちの代わりに神様を愛し、隣人を愛し、神様に完全に従われました。そしてイエス様を神の子、救い主として信じる者のすべての罪を赦し、永遠の地獄の刑罰から救い、永遠の命を与えると約束されました。

教会では、誰にも理解できない異言ではなく、誰にでも理解できる言葉で、この「福音」が語られなければなりません。それでこそ、教会に求道してくる未信者たちは、自分の罪を示され、イエス様を信じ、神様を心から礼拝する者へと変えられていくのです。

しかし教会では、牧師だけが福音を語るのではなく、「皆が預言するなら」とあるように、信徒一人一人が「福音」を語らなければなりません。牧師が礼拝の説教で「福音」を語り、信徒一人一人も自分の口で「福音」を語るなら、人々は「神が確かにあなたがたの中におられる」と言って、神様を礼拝する者となるのです。

おわりに

私たちは、教会として「大人」にならなければなりません。教会として「子ども」であるとは、自分と神様との関係のことだけを考えて、自分の成長のことだけを考えている教会です。もちろん自分と神様との関係を確立して、成長していくことは大切なことです。しかしそれで満足してはいけません。教会は、「大人」にならなければなりません。「大人」になるとは、自分のことだけでなく他の人のことも顧みることです。自分と神様との関係だけでなく、他の人と神様との関係を考えていくことです。自分の成長だけでなく、他の人の成長を考えていくことです。つまりそれは、「伝道する教会」になることです。信徒一人一人が「福音」を語る教会になることです。

教会に未信者の人が求道してくる時、私たち一人一人が自分と神様との関係だけ、自分の

成長のことだけを考えていたら、彼らはこの教会は気が変になっていると思うのです。そうではなく私たち一人一人が、人を育てる言葉、勧めたり慰めたりする言葉、「福音」を語る事ができれば、彼らは「この教会には神様が確かにおられる」と知ることができるのです。

私たちは、自分たちのことばかりを考える「子どもの教会」ではなく、一人一人が伝道する「大人の教会」になっていかなければなりません。

天におられる私たちの父なる神様。

罪の本質は、自己中心です。イエス様を信じて救われても、私たちの罪の性質は残っています。しかし私たちは、自分のことだけを考える「子どもの教会」ではなく、あなたに従い、隣人を愛する「大人の教会」になることができますように。ひとりひとりが「福音」を語り、神様の臨在が満ちあふれる教会となりますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。